令和６年度　校内研究推進計画

福島県立だて支援学校

１　研究主題

資質･能力の育成に向き合う授業づくり **～単元研究を通して授業づくりとカリキュラムの充実を図る～（2年次･3年計画）**

２　研究主題設定の理由

（１）主題の捉え

【育成を目指す資質・能力の育成】

　学習指導要領において、知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」の育成を目指すに当たり、学校教育全体並びに各教科、道徳科、外国語活動、総合的な学習(探究)の時間、特別活動及び自立活動の指導を通して**どのような資質・能力の育成を目指すのかを明確にしながら、教育活動の充実を図るものとする。**その際、児童又は生徒の障害の状態や特性、心身の発達の段階等を踏まえつつ、次に掲げることが偏りなく実現できるようにするものとする。

（１）知識及び技能が習得されるようにすること

（２）思考力、判断力、表現力等を育成すること

（３）学びに向かう力・人間性等の涵養すること

【学習指導要領解説・総則編(幼稚部・小学部・中学部)　第１章２節の３】　※下線部は研修部

　本校は令和４年度に新設された学校であり、令和４年度は大笹生支援学校のモデルカリキュラムを参考にしながら教育課程を実施してきた。知的障がいのある児童・生徒が通う特別支援学校であることは大笹生支援学校と共通しているが、学校規模、施設配備の状況、児童生徒の実態などの人的物的な体制は異なり、両体制を整えながら授業づくりを進めてきた。学校の所在地である伊達市と福島市との生活条件や環境条件等の違いや特色、資源等を生かした授業づくりについて個々の教員が模索しながら進めてきたところであるが、これらを活用できるよう組織的に整理、計画、実施するところまでは至っていない。本校におけるカリキュラム・マネジメント（＝教育活動の質の向上）を組織的かつ計画的に図っていくために、資質・能力の育成を目指す（資質・能力に向き合う）授業づくりの充実を図ることは必須である。

　「資質・能力を育む効果的な指導」について、学習指導要領においては、「単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、そのまとめ方や重点の置き方に適切な工夫を加え、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して資質・能力を育む効果的な指導ができるようにすること。」と記している。(総則第１章第３節の３の（３）のアの(ア)）単元や題材など内容や時間のまとまりを見通し、その中でどのような資質・能力の育成を目指すのかを踏まえて行うことが必要である。資質・能力の育成を目指していく中で、一つ一つの単元で育成を目指す資質・能力がどのような力なのかを捉え、どのように授業をしていけばその力を育成できるかを考える、という、教員一人一人が資質・能力に向き合う授業づくりが必要であるという課題が改めて見えてきた。

（２）過年度の取組から

令和４年度は、研修テーマを「“だて”の地域資源〈人・もの・環境〉を生かした授業づくり～「年間

指導計画モデル“だて ver.”」作成を通して～」とし、「だて」の資源を活かした授業実践に取り組んだ。各学部での取組については、学校周辺の地域で活用できる資源探しや、各学部で課題だと捉えた、学びの履歴の確認や年間指導計画等の学習内容の整理などについて取り組んだ。大笹生支援学校で作成した年間指導計画モデル※で記載されている学習内容・活動を実施するための資源で活用できるもの、題・教材について整理することに努めた。開校すぐに本校の課題を捉え、それについての研修のテーマを設定し、どのように取り組むかを計画し、組織的に実践することは難しかったが、授業づくりとそれに連動するものについて以下のような課題が見えた。

> ○資質・能力の育成に向き合う授業づくりの取組（「何ができるようになるか」「どのように学ぶか」を具体化して授業づくりを考える）
> ○１２年間を見通した学習内容の配列・計画（いつ・どの時期に、何を学ぶか）
> ○上記を進める上で、考えるツールとするための様式等をだて支援学校に合うように見直し、修正、改善等を図ること

※年間指導計画モデル…大笹生支援学校で「何を学ぶか」を明確にし、教育内容の整理と共有化を目指すためのツールとして作成、活用しているもの。各教育課程及び各学年の「年間指導計画」の標準例(モデル)を整理し、教育内容を「見える化(可視化)」することで、教師間で共有しながら見直しを図り、学部間、学年間、教科間でつながりある年間指導計画を作成することをねらいとしていた。

大笹生支援学校で使ってきたもの等を土台にしながら、だて支援学校で育成を目指す資質・能力に合わせ、修正して見直しを図っていく必要がある。現状では、学校が取り組むべき課題についてどのように取り組み、解決していけばいいかを考えていかなければならないことがたくさんある。この現状について、平成２７年中央教育審議会「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について（答申）」（以下、平成２７年中教審答申とする。）では、「教員一人一人が他の教員と協働しつつ、学び続けるモチベーションを維持できる仕組みを構築することが重要」（下線研修部）としており、向き合う課題として指摘している。授業づくりに必要な仕組みを整理して考えることと、資質・能力の育成に向き合う授業研究を進めるための方法について考え、整えていく必要がある。学習指導要領では、以下のような記載がある。

> 各授業の個別の指導計画(Plan)―実践(Do)―評価(Check)―改善(Action)のサイクルの中で蓄積される児童生徒一人一人の学習評価に基づき、教育課程の評価・改善に臨むカリキュラム・マネジメントを実現する視点が重要である。

学校全体で、どの課題（課題のどの部分）から取り組んでいくか整理しきれていない部分があるが、学校として、資質・能力に向き合う授業づくりに取り組む、とりわけ、目の前の直近の課題である、日々の授業づくりに取り組むことが重要であると考えた。この、資質・能力に向き合った授業づくりとは、１単位時間で育成されるものではない。内容のまとまりごとに、知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等がバランスよく育まれるものである。つまり、資質・能力に向き合った授業づくりとは、“単元・題材のまとまり”を見通した単元研究が必要である。単元研究から、学校全体（を見渡すこと）につながると考えた。

令和５年度は、上記で述べた、目の前の直近の課題である、日々の授業づくり＝単元研究に取り組むこととした。単元での育成を目指す資質・能力に向き合い、単元研究を進めることを通して、学校全体

（を見渡すこと）につながると考え、各学部で実践した。成果としては、主体的、対話的で深い学びの授業改善の視点での単元構想を行ったことが挙げられる。育成を目指す資質・能力について明確にし、教材選定や場の設定、子どもの思考の仕方等を想定しての単元構想を行うことができた。また、継続して取り組む課題としては、授業での児童生徒の学びの様子を見取り、修正しながら単元を進め、学習評価からの授業改善のサイクルを回すことである。特に、子どもたちが具体的にどのように学んでいたかを見取り、評価すること、それを通して他教科等との関連付けや教科等横断的な視点をもった授業づくり、１年間の学ぶ内容について振り返り、単元配列（年間指導計画）の修正・改善につなげていくことが必要であると考える。

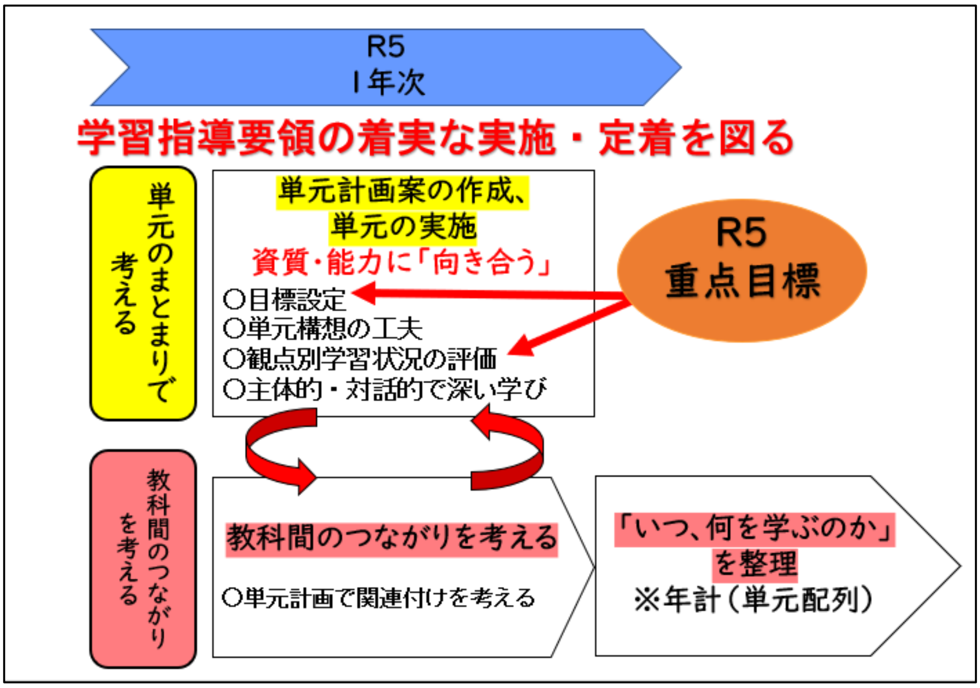

図１　令和５年度（１年次）の取組の概要

（3）研究主題に迫るために

児童生徒の資質・能力を育成し、生きる力を育むためには学習指導要領を着実に実施することが必要である。学習指導要領で示されている単元づくりで示されている点について挙げる。

【学習指導要領で示されている単元づくりで押さえるべき点】

①本校の育みたい資質・能力から、教科等の資質・能力のつながり
②単元における育む資質・能力の明確化
③単元における評価規準と評価計画
（いつ、どの資質・能力を育んでいくのか）
④授業改善の視点（主体的・対話的で深い学びの単元構想における意図的な設定場面）
⑤子どもたちの学びの過程（習得・活用・探究）をデザイン
⑥単元間のつながり（教科内、教科等間）
⑦教科等横断的な視点に立った資質・能力を育む視点
⑧「何が身についたのか」観点別学習状況の評価と授業改善

これらを実現することが、児童生徒の資質・能力を最大限に伸ばし、生きる力を身に付けることができるというゴールに近づくことができると考えるが、この①～⑧までを全て、単元の中で、また教員一個人で実施することは難しい。しかし、この視点で単元づくり、授業づくりに取り組んでいかなくては、その先にあるカリキュラム・マネジメント、学校づくりにはつながらない。１年次は「育成を目指す資質・能力がどんな力なのか」「どのように学ぶか」を具体化して考えぬくという視点で授業研究を行うという課題に取組むことからスタートし、②単元における育む資質・能力の明確化、④授業改善の視点（主体的・対話的で深い学びの単元構想における意図的な設定場面）について考えながら他の項目について学校全体で、組織的に検討しながら順次取り組んでいくこととしたい。単元研究に取り組むことで、学習指導の充実、学習評価から質の高い教育活動を目指した教育課程の改善につながると考える。

（４） ２年次で目指す取り組み

令和６年度、本校の重点目標は、以下の通りである。

児童生徒の資質・能力を育成するために、教科等横断的な視点をもって各教科等の学習内容を検討し、授業づくりを行う。

学習指導要領総則によれば、幅広い学習や生活の場面で活用できる力を育むためには、教科等横断的な視点をもってねらいを具体化することと、他の教科等との関連付けを図ることで教科の枠組みを越えた資質・能力を育成することにつながるとされている。したがって、単元研究を通して単元間のつながり、関連付けについて見直し、単元配列の修正についてもできるところから取り組んでいく。その中で、各教科の文脈の中で育成・発揮を目指すことを意識することから取り組んでいくこととする。このように、本年度は学習の基盤となる資質・能力やその他の教科等横断的な視点に立った資質・能力について意識して明確にし、実践・学習評価をとおして検証していく。この研究を通して、教科等横断的な視点に立った資質・能力について理解を深め、さらに、学習指導要領に基づいた各教科等の枠組みを越えた資質・能力について明らかにし、日々の実践から意識できる仕組みにつなげる。

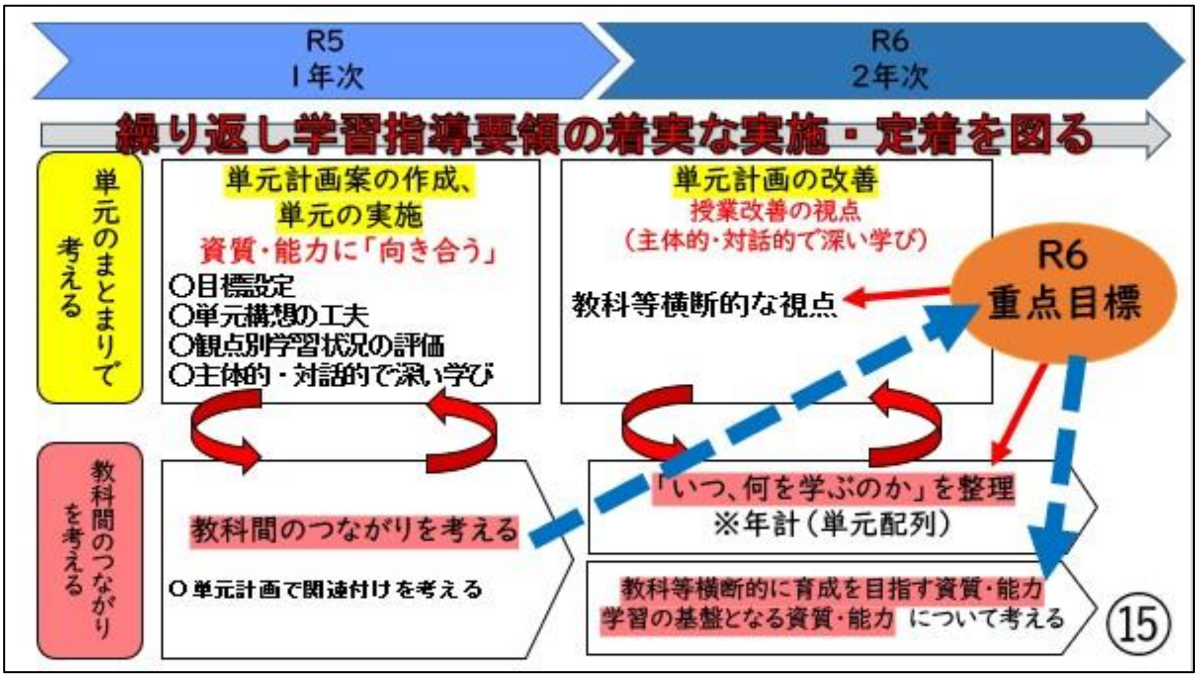

図２　令和６年度（２年次）の取組の概要

3【教科等横断的な視点に立った資質・能力】※関連付けて指導したい資質・能力に〇

学習の基盤となる資質・能力			現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力	他の能力 ※キャリア等
言語能力	情報活用能力	問題発見・解決能力	・健康・安全・食に関する力 ・主権者として求められる力 ・新たな価値を生み出す豊かな創造性 ・我が国固有の領土や歴史について理解し、伝統や文化を尊重しつつ、多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦する力 ・地域創成等に生かす力 ・自然環境や資源の有限性等の中で持続可能な社会をつくる力 ・豊かなスポーツライフを実現する力	自己理解・自己実現の育成

図３　学習指導案における単元での【教科等横断的な視点に立った資質・能力】の項目

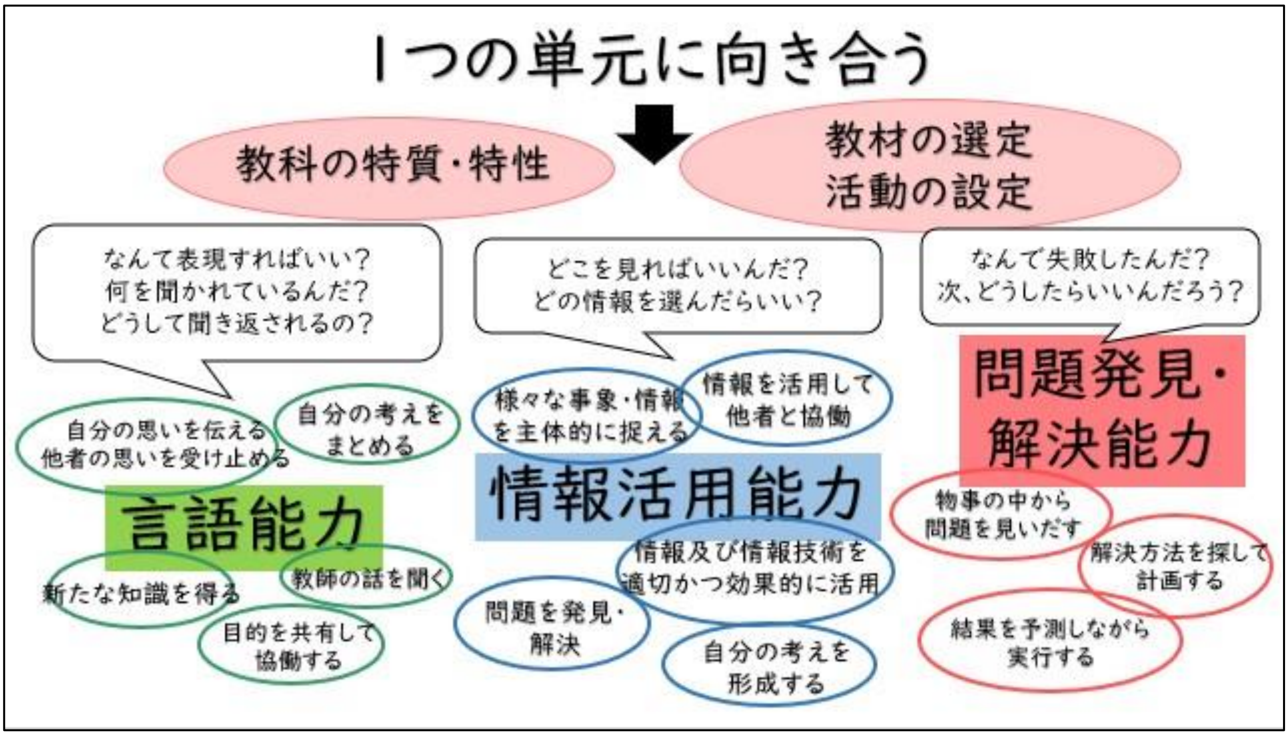

図４　単元構想における学習の基盤となる資質・能力やその他の教科等横断的な視点に立った資質・能力

４　研究目標

（１）単元のまとまりで資質・能力を育むための単元構想及び学習評価の充実のための単元研究を継続して行う。（２年次）

（２）教科等横断的な視点をもって指導内容を組み立てていくため、単元研究を通して年間指導計画における単元配列の見直し・改善を図る。

（３）教育活動の質の向上を図るカリキュラム・マネジメントの充実を図る。

（４）教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成について、文献研究も含む、実践知に関する研究の積み重ねを図る。

5　研究方法及び内容

（１）研究組織は、小学部、中学部、高等部とし、各研究グループで単元(題材)計画案に基づいた授業実践を通して校内研究を進める。

（２）「育成を目指す資質・能力に向き合う」の視点をもった単元づくりにおいて、育成を目指す資質・能力（何ができるようになるか）を具体化して考え、単元・題材での学習内容（何を）や指導方法（どのように)、主体的・対話的で深い学びを実現するための手立てについて単元(題材)計画案を作成、検討するとともに、教科間の関連付けについても習得した知識・技能の活用・発揮等について授業実践を通して理解を深める。

（３）教職員一人一人が授業研究（単元(題材)計画の作成）の視点について理解を深めるとともに、各研修グループで授業づくりについて協議することで授業の質や教職員の授業力の向上を目指す。

（４）グループ内、学部内での授業参観や授業研究を通して、教職員同士が学び合う場を設定する。

（５）全体研究会において、各研究グループの内容や成果と課題を共有することで、校内研究の共通理解を図る。

5　年次計画（取り組みながら修正していく）

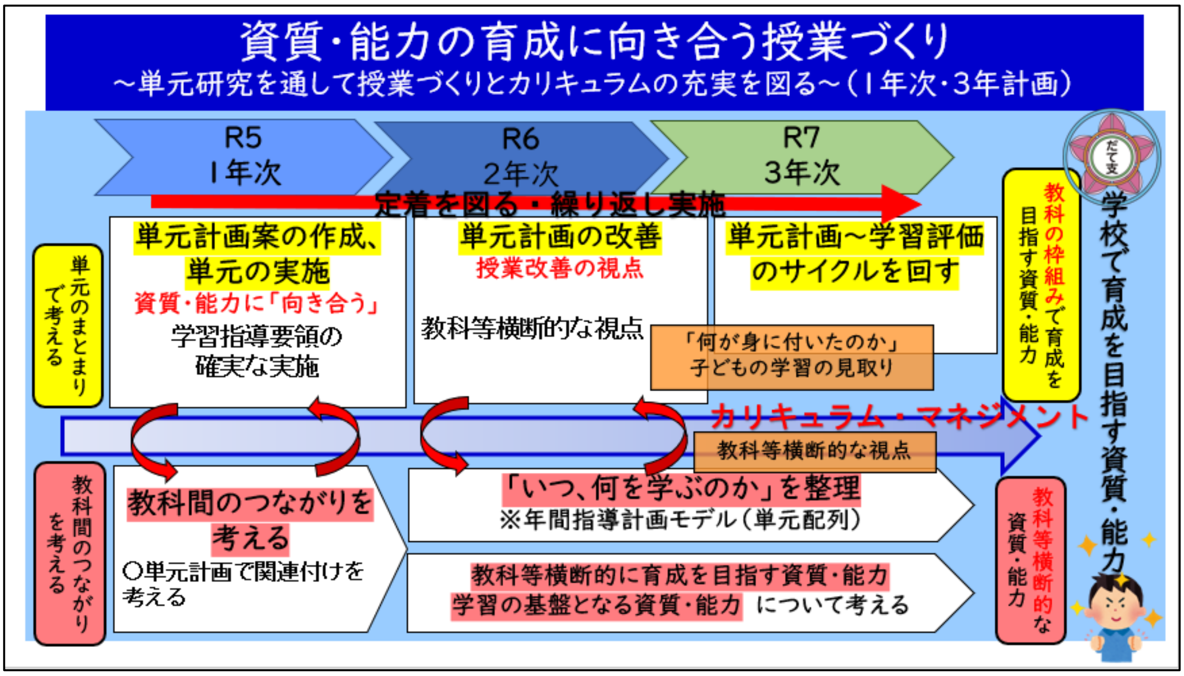

図５　３年間での計画

6　参考文献・資料

・特別支援学校教育要領・学習指導要領解説　総則編（幼稚部・小学部・中学部）

・特別支援学校学習指導要領解説　総則編（高等部）

・令和元年度研究集録「一人一人の学びを支えるインクルーシブな学校づくり・３年次～大笹生支援学校モデルカリキュラムの開発と授業実践のまとめ～」

・平成２８年中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について」

・令和４年度相馬支援学校研究集録「資質・能力を育むための単元研究からのカリキュラム・マネジメント」

・「知的障害特別支援学校のカリキュラム・マネジメントと単元研究～学習指導要領の着実な実施を目指して」福島県立相馬支援学校　ジアース教育新社